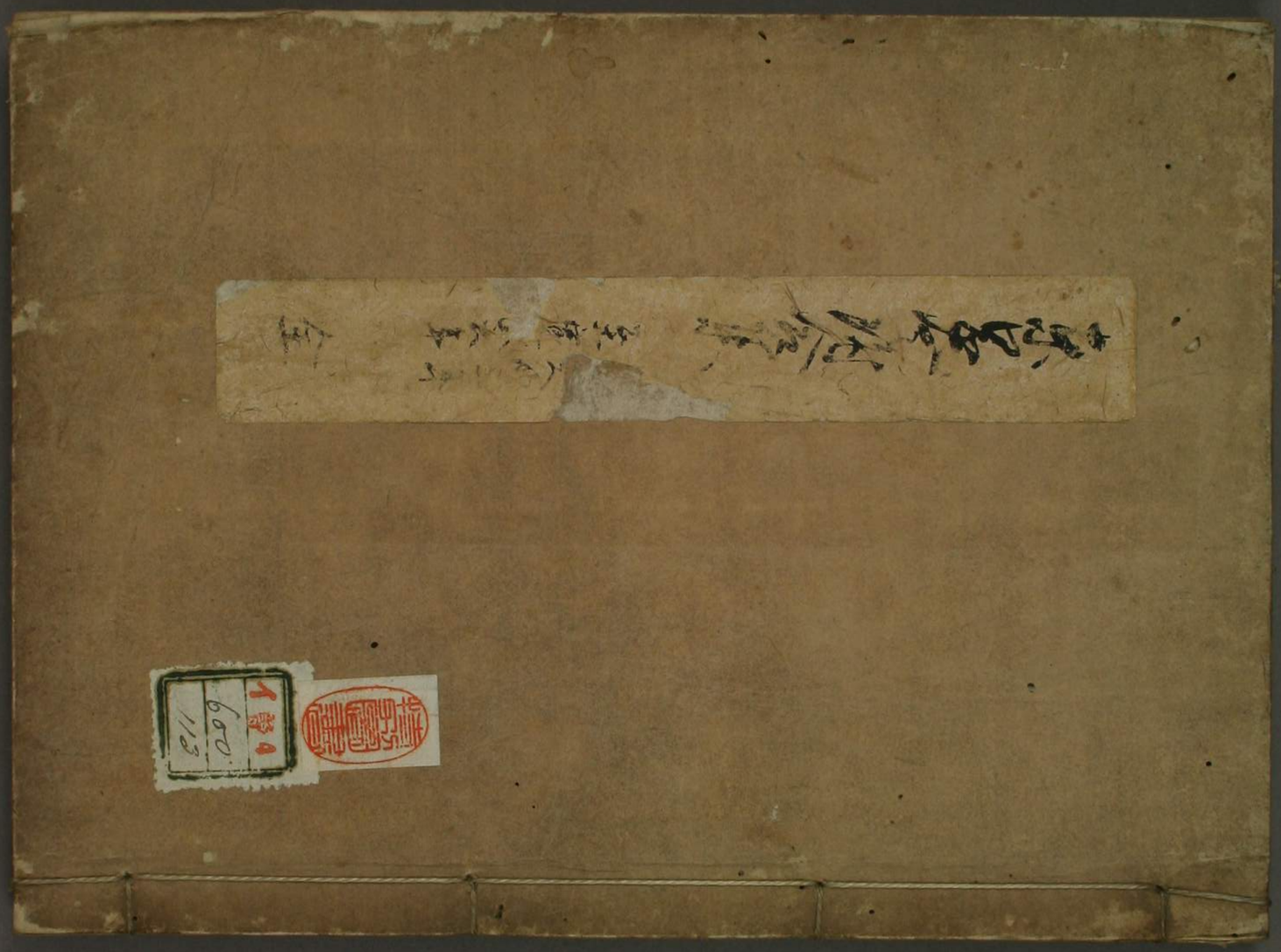


天明二癸卯冬十月

奇絶行

金遠

師平菴

祥

瀧澤文庫

門 イ曾 帙 600 巻 113

紀長谷雄の詩序に曰

吾山也汐干潮

文筆

庭下ふるの蓮を換南天

由来

此也猫の貧を言ふ

歴史

身切けの笹ふ厚雪一歳

白花

秋の雲ふ川流の石

金馬

[illegible]

御燈揚ゟ東福寺の文山

一生を旅の空に切迫る雖堂

卯月ゟ今年迄

[illegible]南ゟ始て参り候盛之

[illegible]ゟ同所ゟ[illegible]来

鶴ゟ[illegible]ゟ[illegible]月花

[illegible]小しゟ秋の[illegible]る

[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]堂

幕[illegible]ゟの殿の[illegible]山

[illegible]ゟ遊ゟ[illegible]来

市[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]

題詞

つと人の伊勢まゐるに卯詞

詞桃の白きをみるに　文雲

卯詞や日あふぐつゝ拾ふ　山牛

初月や小寺搗屋や濃詞　白元

帰詞や燈の下拾遺　孝之

世事のつゝ

現くゝ力なき詞

ゝゝ山詞　青山

寿永二年七月

東岡舍

之吟

義語奇絃訳

判者

塙之亭菴

羽織を取雄と為て山猫　金馬

酒の肴にんにく　雅之

其の為に茶羽織　一琴

御ご馳走よし　二弓

月の夜をいそぐ猫の嘯く　二之

泊りの雅の鶴と鶴と　二琴

[illegible]と秋の三姿

[illegible]へ[illegible]と鄙の里

[illegible]蛇[illegible]

[illegible]次第[illegible]

[illegible]の[illegible]て

[illegible]ぬ[illegible]

[illegible]

[illegible]て海の月

[illegible]の[illegible]

[illegible]子[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]て[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

一　[illegible]の[illegible]外　七　一ヲ

[illegible]の[illegible]　八　文

[illegible]の一[illegible]　六　琴

二　[illegible]の師匠の[illegible]　七　文

[illegible]家[illegible]小[illegible]の女中と[illegible]　八　文

[illegible]二日小[illegible]の[illegible]屋　八　一ヲ

[illegible]ヲ[illegible]て[illegible]の[illegible]年　九　文

[illegible]帳[illegible]小[illegible]　九　一ヲ

胡弓二の[illegible]功[illegible]ヲ文[illegible]　十　文

[illegible]中[illegible]ヲ[illegible]　概[illegible]

看病の[illegible]ヲ秋の風　九　琴

二　[illegible]小[illegible]を[illegible]神　概[illegible]

何事も自然の業にて
十言

蓮ふる水に入る蛙
十一文

世流れの流れのあきて
十琴

苔むる井戸に人も
十一文

大寺の落葉のもえ
十一文

西院の内にしるこの板の
概年

天金馬 地馬琴

人羅文

ロ 咲こゝくのきヽス 二 くに絶かるゝ ハ
二 孫をする 七 ゑ 一 脈しあとゝろ る
一 行灯ト御乃公英のちゃれ ハ
一 敵あれいや・のしふめ月 つ
二 なまもう 一 殿をまかくら庵京 ら
一 ふらい 一 孤の御しれそ え
二 みえるの 二 少信しまんさ多は ハ
一 彼をに佐邦いふ安を気賀杠ふ ハ

ロ 紫端も 一 宴ほおゝ世い列世界 ゞ
一 きめ色の 五 まとう御しくし ろ
一 定ぬのいきこを見へ 一 あるも在 ハ
ロ 万まふ 一 墨らの里見さ立て し
一 西路の 一 松ほもらかめい吹きん よ
ロ 一 石能ふ 一 の秋らん隣陽紀 柳
一 天も 二 そ女浅のもし宜ちの女 ハ
ロ 那なもん 一 みえでちめ伴られく ハ

三月廿日

一 天保二年卯の年より

一 横田八郎左衛門様御代

一 柳原

一 ㊐ 杉十

一 畑作物の事

一 小麦

一 大麦

一 八月廿日

一 稗

一 蕎麦

一 粟

一 黍

一 大豆

一 小豆

一 菜種

一 胡麻

一 綿

一 藍

一 麻

一 苧

一 煙草

一 茶

一 仏桑の事

一 毎年種蒔之

一 畑方之事

一 畑方之事

一 麻

一 苧

一 煙草

一 茶

一 仏桑の事

一 毎年種蒔之

一 畑方之事

書海あまのかりもの代かな
秋小[illegible]し乞れ都く
里谷の海きもらし[illegible]し
旅で住ふいきな面ん
折しまれ錦色〳〵み乙うも
又小五尺の下[illegible]
それとも綱の[illegible]きまき言し
松こそ[illegible]の[illegible]まゆえ
衆の下紙あれ以を錦の緒[illegible]

[illegible]人[illegible]ぞ[illegible]
玉津の又よい[illegible]さなん之
今は分の時しと[illegible]
月夜とて[illegible]あやなき[illegible]
住の気の流し[illegible]世の月
禅綱し[illegible]の世を[illegible]
達も候[illegible]
能なうて[illegible]庵笑の[illegible]

流れの空世ならしまる

くいはふかれんを据り分

薹花ん膝を伝ふ虫節

かたるふいかいゆのこまやかさて

あを山の郷ふの月も月代

手もとをいお横佐るふやすれ

流行おちあさいけ

皆れと前帯も絵のとめらぬ

堂解けし神のなかき

醒は風かとせまる花の中を

火回会をて汲る気分ふ

高のらみふ楓の宿銭却

年もハナトの横席立要也

秋立の隣しくしもる小隣の分節

うるしくしもの月約一句

気ふ留る出も車の多とかる

筍出のあり〳〵絶ぬ日も

黄鳥の声やさしさも

通し宇土毛をもつて

切服佐の断をそれ付きり

茅も荒く庭のおく

さへ青まれ山の川の音

つかしきやうも

兎出のまたれ

きて通

鼓

作文の公んに桐代を

蜘蛛の巣

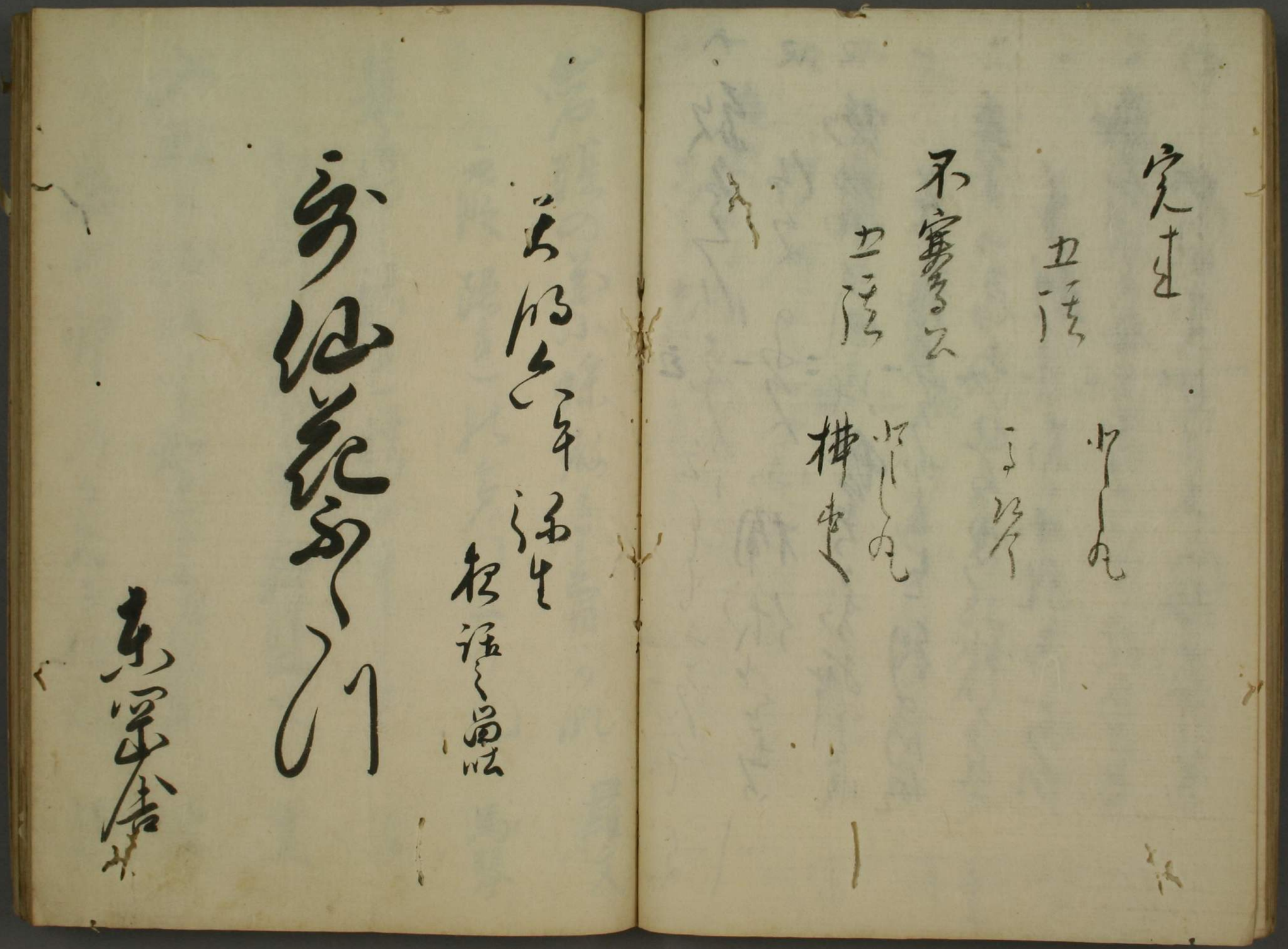
菜の花

竜の

ま劔

武

比もあぬ



岩瀬の茶小路散るまでの間　羅文

嚴瀬川北多門二の丸　馬琴

隻近く流れ行く稽の音　仝

ちらりとのぞく料理好き　文

入船の汐汐と知らる月の宵　仝

夜の卯乃くるる秋風　琴

二條高倉の西菓子屋さうせ　全

世宝屋世宝屋小幸の書町　文

不つくと何刻やら石の苔　聖

今そこ嬉を側を流やく　文

はるとと十方菓子屋　聖

京伝さうせ陽花の色　文

竜さ絶えて山しを思ふ我洞　聖

粋の嗅を面ふ袖の香　文

青柳久吟冒頭福引　聖

あの二つ山し実樹附　文

水香の小ふ別を春の月　聖

学ばしろへ口る嗅　文

夜ふけ一家うちの連歌し　全

月のうちと彩色浦人　躬

引眉というとこの事は浦方富　文

何のとのおもふ人おのの事　躬

山道のうち小一里ふ附ふり　文

赤ま名所の一日暮ふ　躬

結ふ初使の浦の人ふれ　文

附ふ鯛の優ノ十人全　躬

ふ[illegible]れのいとうと今更持あま　文

ふ馬乃[illegible]川東と藤　躬

松風ふ形燈ふ月落ふ　文

誰か待ふ秋の夜　躬

撰集抄の紙をふかせ給
りしを腐のなる服　文
樓ふかせ青鬘の匠の隠れなる　仝
行くへ雲ふかせ給合の松　聖
曉の星ハそそぐふかせ給霊　仝
ちんりきんの時時の響　文

蓬萊の古巣へ移る人もこの風　馬琴
振出ハ火縄と秋の陽炎　羅文
海面を見渡せば樓の喧所　仝
童ふ積する千菓子屋　琴
象の国こそ二日の月の新綿　仝
秋を感ずる　文

熟睡して時を天宝極已　仝

鬼界ヶ嶋に帰し時　琴

落のひとつ足ハ女の里変なる　文

活動の雲ふ藤ゝる移香　琴

卯の雪ハ碧山詩ふ波涙里　文

石をおのの赤太刀尖ち　琴

茶ハ氷ふ汲ん波の調を　文

代盃茶盒と三日西月　琴

薮入をいとふ連ハ来　文

白代貸ふ恵泥の家　琴

彩形新の俗浮世ゝ　文

遠を陽ゝ雉子の一声　琴

遠近の家にうせ免れ丹波山　合
弱い男の紅入荷へ附　文
あのさと毎朝ずとの膳を押却る　琴
古き樊りを小夜の衣紙　文
きらきらと落る水晶の峰くの雫　琴
竹の音道の碎て落る　文

水鶏の人のうとき宮の御　琴
抑さらしの俳諧の集　文
市中小蓮しまる小高　琴
藤屋なるし乃沖の鷺　文
新しき月小庵梅の四人二人　琴
山川草木三礼秋の声　一文

蛇一ツ、雀の笑ふ宮まとひ　仝

阪樊さ――ふく髮結ひけり　琴

郭公る伯母の病氣の案られ　仝

飾紀集むる多者の文

二三年笑ふ女花の日和みる　仝

蹠飛来有二年連る蝶　琴

七師二回忌

追善

東圓舎

[illegible]十七日[illegible]二十師

法橋 仲興 吾山師行居士之四忌

[illegible]

正[illegible]院[illegible]墓前[illegible]

師恩の厚き[illegible]

新興[illegible]

[illegible]

東羅舍
羅文

一

遠林ハ霞く
男花の蔭下に情めて陰も

羅文

花る人老なくて作め紙袋ゟ
宮居し菓ふ此君の枝 馬琴
あふの山まつ山ふ立添てく、
てまを我ふ謙そて去りて 文
秋もすゝ半年越さぬ虫の声、
あのるゑみくもれ詠の雨霊 琴

絡縺むし日なの垣つく、
おれ揚ばぬくの迎ちり 文
指折ふ六ゟし家の行し雕き 琴
本貸の花ぬ是ふ作めく色 文
生来綿の枯れと書とるふ摺 琴
指子と知つて妹ゟまて春 文
随ゟ返し細らう有の蔭月夜 琴
ぬ手ふちぶまこうれの文字 文
こよ安載て川清風気の晴萬力 琴

十

香薫波に酒氣吹来る　文

離宮蝶の花も九重府　琴

住の海うかれ来ても戻る里　文

嶋里の隣ても来な人出ひ、

踏ぬ合点のされと筆　琴

方波小四半い秋の集残　文

尾浮かれ来外繁昌屋根　琴

色肌の色桜御る名れ家　文

別し踊球替し流皇し　琴

り美出もいさ白浪の船子まて　文

むり立路鳥も松風のてし　琴

奥ふのまて府中の宮の郭公　文

彼楼あかりて入るの月　琴

離兵の論と落花袖ぬ香て、

谷川廉の一ツおくるて　文

声も来番て唐の遠詠、

身のめ業も素生可笑　琴

古仏衆波も開し無風云て　二へ

さんあめし おも車れ二ツの文
冬の花ちの木細工とく白句集、
さら鳴鳥乃 種 初ふ下ろ 琴

師走十七日ニ先師の三回忌ニ當
あ里けれは忍ふむかしむかし髪の
ゆかり有月ふ花ふいつくまれけれ
年々の里日かなりて師ハなき人
の数ふいり弟子も花年光
ちふふ花ありけれはしくの裏の
あまりふ妙ふも萬よて一時詠る
さく顔色のわりとも又
ありれかや。

うゝかや
廿日ふ近き冬枯木

曲亭
馬琴謹

完來
真款 諺
儼潛知濂洛關閩
乙卯 冲菴
兩吟

巻中 無附 易韻

春興

隱居

馬琴

春の霞

春の夜

山居 明野雜

盡興 酒如海

結露 月 玉

雪の名月の影東西

僧正の声業を尋ねて
一日遊ぶ間ヵ渕
百里走る嵐ヵ雨
[illegible]の滝枝橋
[illegible]の源
[illegible]の年

同下見金踊ヲ
雲上待雁ノ連
[illegible]の庫
擣廟問神仙
[illegible]の屋[illegible]
[illegible]日文
[illegible]の毛氈

山焼美人笑　十五文

履人を仰ぎ張廿新　十七文

東ヶ谷ケハ神を仰けるを流の迹

来て　遅　未唐ニ　十一文

[illegible]

[illegible]

寄糸納言汁　十二文

獻風早咲椿　十五文

仲光悲愛子　十五文

[illegible]濱

秋[illegible]月[illegible]の夕[illegible]　十七文

群雀寿竹春　十四文

[illegible]里の冷素[illegible]

吹貝告飯時

守塞遥日り　十六夕

[illegible]　十七夕

[illegible]

[illegible]

諸島轉可詩

[illegible]

[illegible]

[illegible]

二十七夕

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

之所京師
正風俗
所

咲淋て

山一輪乃

榊かな

馬琴

書の哥もふ人の哥羅文

こゝろ賈の戒ふ風こゝろ

こゝ[illegible]の月

海[illegible]能[illegible]

[illegible]を踏[illegible]つゝ垣こゝ

菌糸が[illegible]る事と第

[illegible]と麻布の藤

[illegible]

[illegible]の藤奥の篠

墨象乃功や[illegible]る御代様

八[illegible]の[illegible]

[illegible]

天神様の[illegible]

[illegible]の時[illegible]の

[illegible]

折敷の屠蘇の[illegible]

之所齊紀行之內

讀林所

日東の
かぶ紅や
初日乃出

羅文

枝渕澈樹の色小菊
手長乃宝数乃人
つ巻ふ二ツ乃嘘こゝろ
秋風乃ふきて行月の雲
第仙子の蕎のふ屋

京の鰹（トガ）乃仁ゝ川みち　元

ゝ仙人の居所流る　元文

長生乃薬未成の世ゝり　元

似せ肩板の元安ゝ面　文

清敬　道ひとゝ人ゝもゝゝ川や雅　元

雪中菴蘆太点　　源川小六新吾

折〻の少景惜しのられて。
病の名残を手の踊りに
なぞらへつゝ紅唐の墨と。
雪小神泉花の塵とゝ
我小徒さと浪男ゝ
朝日を一日中ゝゝゝゝ

世の移り変はりあちこちするから
いつかふたゝび紀年の線極と
往感の線極とが
八年目と極めの年度とが
十二年目と八年目とは一致
八年目に雲母のみ動き
開山のうゝ弁も動き始め
溢れてあるく投網と

雪中菴蓼太句

折れの小枝折れもいのられて
看病のうゝ枝を丹の線てゝ
雪小神泉花の色と紅
我小縄と境見て泣く
朝日を一日中見て過
色替へぬ紅とは何時
世の移り変はりあちこちするから

以下数しるす事の總概

往愚の説もよれるかた

八年間と極めの年尾なるべ

十二年とえば名を小川中う

人を買色ぬ者此あり中

開山のうれ筆も名り給ひ

置て打ちあり〳〵投細

投らるぬ姉小ふ藤の買合せ

蔵秋の間しるして五十年

為無ふる色ぬ中内を祭らふ人

業主人小千代の買ふ法繁

白羽の征矢を神の錦水

疫病の物をあり虫をは

いふ〳〵の但所をかる新無人

白蓮小三絃ふちと仙台取と

尸人をもとなる尼の当時

夜世と男色の家利

盗を馬〳〵家〳〵へらる

八、[illegible]の[illegible]
胸あたりとも布施の細布
ふ〳〵ふハ弘法小仰の風流
指小蓋し〳〵三日 法使
あ寺の法[illegible]風のそよ〳〵
お継ぎ添ふ稲荷のつまも[illegible]
貴子の新の元七人
酒を祭る世ハ俗のそよ風し〳〵

六、花菴乙兒点　　後別吉原驛

行司を所〳〵立投
いふ〳〵ハ位譲りを蓋し〳〵
加左小を思ハぬ気毋ふ〳〵
唐を動〳〵巻所とる
親を為る我を祈る高り別世界
他咲ら〳〵仏菊の　六月
いつを刊　紙を唱ふ咲き
二、[illegible]

、淵淵珠を生ずと、蛙蛤の喫て行
ここにて中なる長山引導
粥芽の前ふせハのうまして
人、自ふかの者、しく寒し流
義者に自引をつまし暫女性
歌詠の道のかんこ者をを探
思ふの心ふ明ふ路ふ
枝形ふを聞ふ元日ふる

玄峯堂人尤点　　京橋弥生町

行ふれとあふ〳〵露の太刀馬代
甲斐と絵濃へ袖を引ふ
雁書の蹄の跡小羽を伸め
〳〵み文甲斐の文の慇懃
ふふを連ふ産ふ酒者
夕者松ふ路者の志〳〵者
者ふを馬さの坂ハふ〳〵
世中ふ絶ふ便至のみふをハ

伊勢の[illegible]ふ引[illegible]
[illegible]あの自[illegible]て
上下つきと江戸小指子
つ幕と伊達瑞の[illegible]色
紫ういろう[illegible]嫁の大[illegible]
あのれ[illegible]あ[illegible]
祖父の筆[illegible]祖母の[illegible]
[illegible]へか[illegible]江[illegible]

十住菴周竹点　遠州掛川

[illegible]
掉の[illegible]
[illegible]
[illegible]入大工[illegible]好き[illegible]
[illegible]の[illegible]
一葉つ舟と秋[illegible]伽や[illegible]
[illegible]と色[illegible]
紙[illegible]の[illegible]

玉江舎雷堂点

行脚僧の日ハかゝる唐机
旧然と刺ゝ天窓拍ヒ
相乗船死と宿這ひ知れ
入れを蒼〜て乗て
ゝ蒼態の紙めゝ
武蔵ハ見ゝ
ゝゝ子ゝ比叡の僧正

新ゝゝ小唐ゝ巻ゝ
乾鮭の歯小羽織南無三
長石の斬ハ蒼ゝ
尻ゝ人ゝ渦の鍋掛の
おゝひゝ拾ゝ幡ゝ
ゝひ漕ゝ鍛小拾舟
新ひゝの刈田一ゝ
ゝゝ見ゝ扇ゝ
茅屋小せゝ

時雨窓盤古点

朝霧の底へ暗氣して居る

打ちもてあるる小面の仇らしら

やら脱ぎ捨てと低い塀の暗に

紅の二布ふ畳を見らしるひ

急ぎ知らしいに新ふ重ねと

桶伏の脱ふ及へふ身せを

濱ヶ方の秋見ふ貞宝の秋に

喰ふもと呼て鶴を焚ひる夢

後庸研究所

光さほとふ玉ふる雷に

物蔭ふ二夏湯つるものるる

固もれの方ふ雨ふ穂を

ふふふ拾ふ紙に一冊

門者の出精進見ふふの夏に

比丘尼哭ふ別世界

七蔵て我ふ向へ竹の実に

濡ふ先ふ自脱ぬ信を

二三十年ふ大変ふ夕月歌に

[illegible]め[illegible]と孝子傳と[illegible]

朝[illegible]祝[illegible]毎のふこ[illegible]

[illegible]と後唐を[illegible]故ふ

[illegible]め

子規亭吐月点　　小田町稲荷堤

[illegible]

神[illegible]と賜[illegible]

仏檀ふ仏の町の[illegible]

把筆[illegible]と妻[illegible]め[illegible]

[illegible]彫さ把[illegible]の[illegible]

紙金ふ今朝の秋をつく[illegible]

[illegible]ふ水陸の業る　松風

白[illegible]の衛士ふ[illegible]ふ畏[illegible]

向嶺の茶いとらんで
北際に[illegible]程の悪おらも
行先を又の人年〳〵
指南ふりて[illegible]の八橋
は拙者もの浮橋
船ふるてはもの〳〵唐の人
沸茶より西の機嫌[illegible]
茶いろ〳〵ふ書の試[illegible]
嘶ふの源の流ふ文行

凱陳の名嘘ハ法華経
貴[illegible]のもとふ行の到[illegible]
拙者陸馬と外面仙蓋海
若[illegible]ふと剛い[illegible]
一筋ふ時世を已ふ綱のう人
負[illegible]神の[illegible]
人ふふ矢笠の紋ふ藥の梨
[illegible]ふ[illegible]
葬礼ふ海堂蛭 脳昂蓋提

畑井の日暮をかへて水澄に
立とつゝきたれ左京の里
栗分二見へ比師の池ゑ鷲に
朝飯前にまつて其角か柔
紙帳に怪しき姫か図画に
すき焼ハ振る舞ふ絶て四屋迄
世の中ハまるで三日四日も寝るに
任鮮に成る後の世代
八人の筆へ並ハ寄とて筆に

深林と楚えて風呂の通路
滝の音も瀬々て松の音に
ふりし川に分る結の志ら波
うて琵琶を志て八への絃の響に
惜しやけれを寄の世中
名かりて萬る紹介に八丈に
合奏して叙の下にかゝし　一首毎

橘菴六窓点

橋町界隈

相引小屋流れの声絶えて
ものすごく明るき夜の元日
思ふ叶ふ事の神なれば
八百万神なれば皆白日吉九
地代の安いをかり下京に
ものうき世話敷の御子の減れば
殘ると服は減次第なり
折々の書状共書迄

扨て窓ひと説て法華ふと
紋附を切らけ〳〵なる糸
勝ちるゝ女房なるから
尺八ふ浮世の婚礼さし服装
約り渡ハ〳〵ふ〳〵らの名牛
ものしるしるし長生死
長つ服つ唖の娘の意辰
飛ものいのもとものもの筆

墨水西連文点

馬上帝町二丁目

雁ともたのもしく鳴き渡る秋の夜の
織おろす初霜の白の糸は芙蓉八丈
指分とハ初霜ともいふ鶴を吟ずるに
汝を七ともいふ絵ものをるい
又ぬ恋ふさん或ハ他こころ
紙くあれと彼のこころ石
賢淑へハ恋の汐路の舟数
うかふ居へ仲人ものめる

窮ハ時々くに告ること
三ツ鬼さくこそ捕伏者 脱
人の心ともの者めいく集ること
同帳ふるかる絵の情景輝
錦の果を荒ふ親ものこと
萍の多ともさ花ものこと
酒ふくとと入梅の夕雲
一巻ふやくく満く焦尾琴

坂野谷青雨点

野列拓本

娘の美しき姿を見て
形式的の贈の強て来る
飛々小銀貨の夕暮と
野陳の濯菜をしかる
稚き人を使ふ数十人と
仏出・現
水の流ふ
蕭園の側に流と
幽冥の如くして病を探
[illegible]
指折り拓の戸と濯の色と
坂[illegible]を因面の[illegible]
呵[illegible]人[illegible]を伽の姉妹と
尤迂の顔ふ美しく折
瓜紅脂を扇に取ると
[illegible]めさめ被の顔の[illegible]

三級亭魚汝点

京橋西白魚屋

巴ふたゝび姫女郎　之人に
思ふる千尋ふかきもの柳の陰
をうかくくとあを蛍棚に
年たゝと雁の琴柱とを波ハ
桐馬の貢をを理ふ節ふり
巣をうしふ鶏子親
ふを水移の圍ふと浮舟に
先ふの姉ふふ流ふとをふを

餌をを魚ふ多羽の遊留に
小ふのやふふ考へふ流ふと涙ふ
十八町の奥ふ　恵門に
時毎ふ深を所ふ　を腐貴
ちんちんるゝ蓼麦の大石に
君ふ代ふ生ふあり世ゝ懸ふの
埋火をおくふ小夏ふ川千鳥に
市ふ書りふし　拾遺仰く

雪穿居山幸点

京ふ居るゝ江戸の按見と
かゝるの諸教ふ人を勧るゝ
宮ゝ多ふ長髪見るゝ
京ハまゝ卯月初ゝの風中
繋くゝ見へ芦の稚松
炬火如ゝ迫人迫ゝ
鐘ふかゝゝ面白ゝ
言葉の果のほゝ松

十人ゝ十人ゝ高雲
船ゝ一団見ゝ
まゝ入道と瀧口
三毛ゝと紙屋の厳照ゝ
所つゝ白小白松毋
分語せぬ氣の嘘せゝ
西落ゝと
作ゝの弦ゝ

雪萬舍文來点　　湯殿天神馬糞カスガ井町

筆法のよと人をいへとも
宗徒ふむ[illegible]雅馬のうるこ
妹うを行ち八馬ともたのまも
相ふ気と胡ちの遠吉吟ちり
若生ふを[illegible]ふ服を巻
煤を洗へふを毎の筆
[illegible]ふとく意度遠云
世ふ河脉の宮伸と吾ふ潜ちう

皆月の新[illegible]ふ欠かも
断[illegible]潜ちる[illegible]ふ鄭
古書のうしうへ常を引也
紅絡ふ赤子を公るの大将
たくるそうふ待る紙冠令
戯ちうかほる白ふと 辻ち花
嘗おも足うしう千枚叙の物語
傾城抱ちう麻ぬう 殊念

十三雙点式

青下 二字四点 朱下 二字五点 三字八、
十点カクシ 翡翠一点増 藝太
九二、長三、

青 二字四点 朱 二字六点
三字九点 十五点カクシ 乙兒
玉一点塗 九二点 長三、

二字十二点 三字七、
四字十、 祥福五点 人尤
十八点カクシ 九二、長三、

二字五点 三字七点
五字十、 十五点カクシ 周竹
九二、長三、

二字五、二字ナリ、
四字十、十五点カクシ　雷堂
九二点　長　二点

二字五点　三字七点
四字十、十五点カクシ　盤沽
史鳥　一点増　九二、長三、

朱五点　三字七点
四字十　十五点カクシ　吐月
鵲　一点増　九二、長三、

梅花　四点　月輝　五点
五字　八点
十点カクシ　雁　一点増　六窻
九　二、長　三、

朱 五点 三字七、
四字十、 十五点カクシ 連丈
蝶 一点増 丸二、長三、

朱 五点 二字七点
三字十、 四字十四点 青雨
二十点カクシ 鳥 一点増
丸二、 長二、

二字 五点 三字 七点
四字十点 十五点カクシ 魚汝
丁子 一点増 丸二、長三、

六花 一点増
余右ニ同シ 山幸

蝙蝠 一点増
余右ニ同シ 文來

四時發句

世中ハ二日見ぬ事ふ様ニ郭　蓼太

ふるあめや行る秋の名ふ松の月

ゆれなびいと新くて八潮ニ為ル

そうりふ飯ふ事のあふ　〃

梅ふ者や千葉ふさそ鶯歌　乙兒

水ふ書ふ紀ふ花のあふ

むつまじや稲刈ふて雀ふ喧と

ふ紙ふ書ふと二筆の白和ふ

京ふ吹くふとのふ花初ふ風　人尤

二三人ふて相ふ笑ふ

市中ハ鶴ふ人ふ秋の暮

うりふ火や低城ふ月ふ文ふ

樵夫あり僧ふ笑ふ紀ふ文紀　周竹

仲秋[illegible]

[illegible]八節と節分[illegible]園の春

冨士[illegible]

梅一[illegible]と老木の西[illegible]

一膳をたゞ[illegible]紙帳[illegible]

[illegible]の月[illegible]月八富の[illegible]

人[illegible]吟や拙[illegible]

雷堂

大根ふ[illegible]月[illegible]

卵ふ[illegible]

秋風や舟[illegible]

[illegible]の池や[illegible]海[illegible]

盤古

野を[illegible]ふ遊[illegible]

形代の祓を[illegible]

草狩や人の[illegible]人[illegible]

[illegible]く深[illegible]

吐月

番茶やいつめる板の下ちろり　六窓

懸ちろりしぼと一秋ふる秋ぶり

初秋や折敷小菊若葉の書椒

夏うゝ小浦の苔屋の時雨哉

ちろりしぼと雲の高吟ゝ面秋ぶり　連丈

貝殻ちろり赤方丈や蝸牛

高人歳を衣かせり星ゝ寄

葱味噌や摺り加さして加の八

苔の花の黄ゝ蒸てや帰る戸　青雨

油灯を結ゝ灯心の蛍哉

有常ゝ娘の比を躍ゝの邪

飼糖の梔刈るや多籠

夜燈や新又漁ゝ月七日　魚汝

ぬるゝ灯仲の下行清水

鬼灯やかゝれても秋の深て行

炭賣ふ声も北部を蕨ふ声梨

日の影しふ雲寄して橋うれ　山葉

笑ふ〳〵居る雨〳〵ふる雲の母

いたゞきのみな山〳〵初霞

初音や先見参の松一本　一

鳥部寺湯て出声梨朝橋　文來

看かりて懶ふ清水の遍歩ふ

為月や八声ふ〳〵鶯ひ花

京北野寺ふ新ふ寺〳〵の松

さし出里蓮堂の庵清水ありめれとも只

を花を添〳〵ふ〳〵ふと百りめれ八ふ

略〳〵

室にや玉の磨にも生気人に学
ぶ和漢の道ありと師丹宿の机下に属して
俳諧に心を寄せてかの集を
或日先生常に携へ給ふ文を帰りて閲読
の折から太祇冊紙より出して
見せられし にこそ浄書の宝
なる物なれとて其蕪風の門より
出し 余に書写せよと請日再ひし

ゆるしの様嬉しく家写し
平安

身もと嵯峨
清し香の季

天明二壬寅季春

東園舎
羅文